

The ORPHAN シリーズ 小説

外伝 『空白の言葉』

注意事項

このPDFファイルは、「スペースノイドの孤児(みなしご)たち」ブログに掲載し完結した小説を、PDFに変換したファイルです。

このPDFファイル及び、当該ブログに掲載する小説、小説に使用している挿絵の一切の著作権は作者にあります。

作者に無断でPDFファイル及び小説の引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売する事を一切禁止いたします。

小説の紹介や個人用としての印刷、個人用途での保存に関してはその限りではありません

古きよき時代だった。

何故なら、善きにつけ、悪しにつけ、人々が情熱を持って命を賭けていたからだ。

運命がその強大な力を持って介入しても、人は享受しただろう。と言っより人が運命を求めていたのかもしれない。

この頃頻繁に観る、覚えの無い光景。

女がただ立ち尽くし見守る中を、

男がゆっくりと無言で、血を流しながら微笑み崩れていく

そして女は言う

“愛してました”

“愛してたのです”

“ユーデリウスさま……！”

己のしでかした事に慄きながら、泣き叫ぶ女は、

風に舞うように、腕を大空へ広げる

愛の証に女は身を投げたのか

わかるのは

わかるのは、私はその時そこにはいなかったはずだ、
ということ

だが、彼は死してなお、運命の輪を廻し続け

逆らう術すべを持たぬ私に、より強い呪縛を投げかける

『星を往く船、海を渡る船には、

羅針盤を操る水先案内人達が乗るだろう。

嵐に迷い、その航跡が失われることのないよう、

彼らが祈り求めるたび彼らが名を口ずさむたび、

船の標を打ち立てる守護神が寄り添わねばならない……

その船は、至高者が造りたもつたものであるからだ

』

ルイーザはけだるい夢の中から、醒めつつあった。

過労からくる軽い発熱のせいか、夜着がわずかに汗ばんでいる。

「……」

仄かな明かりの灯る、ひと気のない寝室で何を言おうとしたのか、乾いた唇を微かに動かしては、疲れが癒されていないように再び目を閉じた。

暫くして扉の外、柔らかな足音と、抑えたような廊下を踏みしめる足音。やがてそれは扉の前にとどり着き、小声で低く囁き合い、遠慮がちにガチャリと重々しい扉が開かれた。

入ってきたのは二人だとわかった。

「……ルイーザ様……」

恐る恐る掛けてくる声は、ルイーザの屋敷にいる侍女である。

「ルイーザ様」

彼女はもう一度言った。

「……起きているわ……大公殿下がおいでなのね？」

侍女は戸惑いながら、はいと答えた。

「いまお眠りであるとお伝えしたのですが……」

その肩を男の手が制した。

「無理を言つてすまないね……ルイーザ殿の寝室にまで押しかけてしまった。二人で話したい」

主人の容態が心配な侍女は躊躇したが、礼をすると静かに戸を閉めて出て行く。

「具合はどう。見舞いに来たんだが、眠つてたら顔だけ見て帰ろうと思つてた」

優しさを満面に、男がルイーザを覗き込んだ。よほど彼女は、自身が思うより大切な存在らしくかった。

「ええ。休んだから大丈夫……レヴィンス殿下はいつお戻りに？」

「昨日だが、君が倒れたと言つ一報で」

すっ飛んできたと言つ。

ルイーザは体を起こすと、シヨールを肩に羽織り、レヴィンスの助けを借りてベッドサイドに足を降ろした。

「私に構わず横になってて良いのだよ。あなたは世界で一番大切な人なのだ。無理はせず、どうかゆっくりと静養して欲しい」

ルイーザはすこしやつれた顔に微笑を浮かべて、レヴィンスの言わんとしていることを理解した。

「一番大切な人を間違えているのよレヴィンス殿下。もうすぐ殿下から陛下と呼ばれる方を前に失礼ですもの？…陛下…」サイアー ユーデリウス二世陛下

レヴィンスは、ルイーザの手をそっと握るように重ねた。哀願の表情《いる》が双眸に映し出されるのが見て取れる。

「ルイーザ。私は正直言って不安でたまらないのだ。ユーデリウス叔父程の才覚もなく、グランス將軍のような力量もないのに、あなたを失ってはこの広大な宇宙をどのように治す^{しち}というのか？ 民はそれで満足すると言っのか？」

新しい世界を前に、飛び込んでいいものかどうか、迷い怯える子供のようにだった。

彼の、彼にのしかかる重責に、わずかな不安を世界でただ一人彼女に吐露^{とろ}したのである。

自分で言うように、確かに銀河宇宙に大国家を造り上げた先代ユーデリウス大公や、その右腕として共に宇宙を駆けたグランスに比べれば、レヴィンスは凡庸^{ぼんよう}な人物ではあった。

しかし、刻はあるべくしてある人物を選ぶだろう。

凡庸とはいえ、幼いころからユーデリウスの傍らに、戦場を幾度となくついて回り、これから必要であろう全てのことに関して、彼なりに見、聞きしてきた。そんな環境は自然と帝王学を学ばせるに充分である。

身に着けた思慮深さと、判断力は凡人の域を出ているとあっていいだろう。

環境とはそのように人を育てるのだ。

まだ遠い先のこととはいえ、国が安定期に入ろうとしている時には、大衆の目を幻惑するよう強すぎる光は必要ないだろう。それゆえレヴィンスは国づくりの基盤として耐えうるタフさを買われたのだ。凡庸^{ぼんよう}さが生む、安定性^{パランス}なのである。

ユーデリウスの残した傷跡は、あまりに深く根深く、そして罪深いものであるが、どうにか彼女の手と、そしてレヴィンスの努力により宇宙は平定されようとしている。

ルイーザは彼の手を握り返した。

「殿下、宇宙は間違いなくあなたを選びました。迷うことなど一つもないのです。これからは、

ギョランアンケルトフ 枢密院^{ギョランアンケルトフ}がわたくしの代わりに国や皇帝を支えていくことになるでしょう。存分に戦いなさ

います」

レヴィンスの労をねぎらい、はたまたこれからを思いやり、微かに嘆息する。

(それなのに)

それなのに、終わらない……

私の終わりが見えない

あんなに、憎んで憎んで、ただ憎んできたのに

ユーデリウス！

あなたは何人、わたくしから大切な人々を奪ったことでしょうか！

あの方すらも奪ったように思えるのに

私の命は長くはないのに………

この呪縛は終わらないのです！

ルイーザの内に、乾いた哀しみが揺らめいた。

その男との出会いは、ルイーザが十にもならないときだったように思う。その頃から、ユーデリウスの侵攻はルイーザの住む星にも聞こえていた。それは、遠い未来のことではなかった。

またたくまに星は焦土と化し、生命のなき払われた黒ずんだ大地へと変貌する。噂通りユーデリウスは交渉決裂すると、徹底的な焦土作戦をとる人物だったらしい。つまりは大虐殺なのだが。生き残った人々は、無残な光景に絶望しながら抵抗するすべもなく、降伏の文字すら意思表示するまもなく蹂躪された。

地表をなめていた禍々しい炎が沈静化してきたころ、息も絶え絶えに再び噂が流れた。

（悪魔が降りてくる）

パニックにすらならない無気力な中、奇跡的に生存できたルイーザは幼心に決意する。悪魔を討つ！

“……家族の仇？”

感情のない瞳で、悪魔は少女ルイーザを見下ろした。

多くの人々が死んで、家族を失って、絶望に背押されて。

非力でも一矢報いる勇気が少女にはあった。

だが、あまりにも無力だった。

“ならば何故、私を殺しそこなったのだ”

勇気ある少女に、子供を相手にしているとは思えない冷淡な口調が、傷ついた心に冷たい針を刺す。

“しかし お前か……そうか……いいだろう……生き延びたのだ。今ある過去を全て捨てる。そして遠い未来を観るのだ。それがお前の成すべき事”

遠い未来を

悪魔の名は、ユーデリウスと云った。

彼に殴られて赤くなった頬がなければ、ユーデリウスの抽象的で理解を超える言葉に囚われていただろう。

ルイーザの内面的な変化を知ってか知らずか、彼は戦災孤児のルイーザを警備兵に預けて立ち

去った。

あれが人なの……？

ルイーザのまだ成熟していない心に、ユーデリウスは微かな陰影を落とす。

彼女はそれを認識した。

『あの人は、ここに生きていない』

これからの生活が恐ろしく思ったことは、鮮明に記憶されることとなった。

できれば二度と会うことがありませんように、という願いは空しく打ち砕かれる。

ユーデリウスが、ルイーザの身柄を預けた部下の名前をフランスという。

少し彼女が成長してから事実には驚くのだが、フランスはユーデリウスの忠臣であり、片腕以上の存在だった。あまり人間的でないユーデリウスと比べて、フランスは温厚且つ人間味にあふれる人物である。

ユーデリウスと同様、妻子は持たないが好い人はいたようだった。

そしてなにより、フランスにはユーデリウスには無い優しさがあった。

行き場のない戦災孤児を引き取って、傷ついたルイーザを癒そうと努力してくれた。ユーデリウスと戦場を共にすることが多かったため、留守勝ちではあったが一人残る彼女に心を配ることは欠かさない。

自然、ユーデリウスへの憎しみに心を閉ざしていたルイーザは、フランスに向かって開放していく。当然の流れといえば流れであった。

だから、まさかそんなことはあるまいと、考えもしなかった。

“よもやこんな形で再会するとは思ってもいまい？”

約十年を経ての対面である。

「お兄様のためにしたことです、わたくしの意思ではありません」

秘めていた憎しみに火がついたように、頬に熱さを感じた。

戸惑いと緊張、そして拒絶の意思を表明したつもりが、あの時から変わらない瞳に思わず視線を逸らしてしまう。

“かまわん。私の我儘だ”

さらりと言つてのけ、肩肘をつく。そしてルイーザを見据えた。

“なるほど、黄金の瞳か……これからにふさわしいものかもしれん”

目を細め、ユーデリウスは恐らく彼の人生においても珍しいであろう、しかし感情の無いやや歪んだ微笑を浮かべた。

ルイーザはつややかな黒髪とは対照的に、金色の瞳を持っている。どこかアンバランスにも見える美しさは、気丈な性質であるよりユーデリウスに似た、神秘的なものを備えていた。時に彼と同じ冷たさをも現しているかのよう。

「わざわざわたくしのようなものをお呼びいただいて失礼ですが、御用がないのでしたら下からせて頂きたいのです」

さすがに居ごちの悪さで、退出を願い出る彼女に

「グランスは良くしてくれるか？」

と、まったく聞いてない風に言う。

「それは個人情報の生活に関わる質問だと思いますので、答えたくありません」

精一杯拒絶してみた。

「フフ……そのような言いようはグランスに悪い。お前を引き取って以来、グランスはただの一度もお前のことを口にしたことはなかった。私の前では、だ。お前の私に対する感情を良く理解していたと見えるな……私としても、特にそついう必要はなかったが」

ルイーザは唇を噛み締めた。

どうせこんな人なのだ。

「それはやつ配慮だったのか？それとも私から隠すためか？」

「………いたい、いたい何をおっしゃっているのです。お兄様はわたくしの大切な家族です。あなたがわたくしから奪った家族以上に大切な方です。人の心を想ってくださいるお兄様は、踏みじって捨てるあなたよりも、ずっと立派な方だと、わたくしは思っています」

揶揄するようなユーデリウスに、思わず語気を強めた。

「個人の感情は私の興味とするところではないが、グランスはお前を大事にしているようだし、お前も快く感じているようだ」

ルイーザの控えめな攻めたてすら、チクリとも刺さらない風で、彼はゆっくり立ち上がった。数歩歩いて右手を空に、ふた振りほど手首を返すように動かすと、宇宙マップが彼の目前に現れた。マップには赤や黄色、青などの光が点滅し、ともすれば美しいインテリアそのものである。

そのまま右手でマップをたどり、彼はルイーザに背を向けたまま言った。

「だが、私はいつでもお前を必要としていたよ」

耳を疑うとはこのことだと、そのとき知ったのである。

「これは……笑止な………あなたのような方でも人恋しいとおっしゃる？」

僅かに歪めた唇の端から　どう笑っても、人にはそう見えて仕方が無い　冷笑が漏れた。

「そつだな………生きているのは苦痛なのかもしれん。それでも死を賜れないのは、もっと苦痛

………

「まるで……誰かの命令で戦争を始めたかのような言い方をするのね。あれだけ非道の限りをつくして？わたくしの星だけではないでしょう！」

“その通り 私はユーデリウスという名の「操り人形」だ
何という傲慢さ！

このような男のために、世界が壊されていくのだ。

操り人形だの、死を許されないだの、ではお前は何者なのだ？

「愚かしいにもほどがある。人はそれを身勝手というのです。自分が何をしてきたか判っているのですか！」

怒鳴ってしまったルイーザを、ユーデリウスは振り返った。

“黄金の瞳のルイーザ。何を基準に身勝手と言っただ？”

「なにが、ですって？あなたが自分勝手に人の運命や幸せを決めてしまったからよ！それも一度に多くの、あまりにも多くの人間の全てを奪った！あなたがいなければ、まだ幸せに生きていた人がいた。これから幸せになろうとする人もいて、人類が最終到達するためとあなたは言っけれど、どんな使命であろうと、任務であろうと、他人から見ればただの身勝手と言っのよ！」

十年分、一気にまくし立てるのを聴いていたユーデリウスは、その糾弾にさえ顔色一つ変えずに、薄いグリーンの瞳で冷気を辺りに漂わせていた。

すこし違ったのは、さきほどの彼と比べれば生気がわずかに宿ったように見受けられることである。

“それは”
ユラリ。

見えないオーラが立ち昇ったような気がした。

“人には個々の権利があり、人生は己で決めるものであり、何者にも干渉されない、自由を言うのだな？”

蒼い炎を、ルイーザは観た。その覇気に圧されて脚が一步下がる。

「判っていることを……」

“その自由がありながら、彼らは私によって奪われ、死に逝った。何故だ？自由を謳いながら人や世のしがらみに苦しみ傷つき、あるいはまた 古代からの文献が語るように、幾度も人類が「至高者」の怒りによって滅びの日を迎えたのは 何故だ？”

ユーデリウスの双眸が彼女を貫いた。

それは直接、脳裏を焼きつかせるような稲妻。

嵐が、吹き荒れた。

(そんな……ッ)

まるで、体内に入りきららない水の流れが雪崩込むように、ルイーザの内側が溺れそうになった。足元が不覚にもよろめく。

大きな鼓動が一つ。胸が苦しくなった。

扉をこじ開けて強引に入ってくるような怒涛の波が、押し寄せる。

(ち…違っ……)

胸を押さえて前に屈む。

(私は……)

心が千切れそうな精神的苦痛を覚えた。

(憎いのよ)

“ 永遠を彷徨って同じことを繰り返す事が、恐ろしいとは思わないのか？”

(あの男が憎いはずなのに……)

(憎かったわ…憎くて、お兄様には悪かった けど……)

フランスの顔が横切った。

(フランス兄様……)

その姿は、一瞬で掻き消えた。

波が飲み込んだ。

波は恐ろしいほどの速さで彼女を埋めていく。

彼女ではないものが彼女を支配する寸前、苦しい呼吸からかるうじてルイーザは吼えた。

「ホホ……いまさら弁解しても人殺しには変わりないものを、何を言うの？あなたが？ならば聞くがいい。その『至高者』やらに！それは、お前を支配する代わりに、盟約が果たされればお前を解放すると

笑っている？

何故わたくしが笑うの？

すでに途中から自分が何を口走っているか判断できなかった。

「答えるでしょうよー！」

(私はいったい何を云ってるの？)

あまりに不意の出来事に失神しそうだった。

しかし皮肉なことに、それから救ったのはユーデリウスだった。

“ ならば尋ねようー！”

ルイーザの肩を掴み、色の薄い瞳が彼女の眼前にせまる。

“ 答えよー！”

ユーデリウスも吼えた。

“ 答えよ！ 《鍵門》は開くのか否か！ 黄金の瞳のルイーザ！”

その後は記憶がない。自分がなんと答えたかも思い出せない。

眼を開けば、そこは自分が住む屋敷だった。

召使達から幾分色づけされた話を、小耳に挟んだ。

ユーデリウス本人がさも愛おしそうに、彼女を介抱したと。

それから、何事もなかったように一ヶ月ほどが過ぎた。

その日、ユーデリウス大公の使者がグランズ邸を訪れた。

グランズの様子からして、グランズはその目的を知っているらしかった。

しばらくして訪問者が帰ると、彼はルイーザを呼ぶ。

「良く聞くのだルイーザ。私は今まで私ができる限りお前を愛してきたし、これからもこの愛情は変わらない。大切な妹、私の娘。 運命は私たちをめぐり合わせたが、それだけではなかったと言つことなのだな」

優しい茶色の眼差しが、微笑む。

「わたくしもグランズ兄様をお慕いしております。 でも、その言いよう、わたくしたち

は離れなければ成らない運命でも……？」

そう覗き込んだルイーザは、グランズの瞳に悲しい色を見つけてしまった。

「兄さまが、どこかに行かれる訳でもないのですね……」

グランズは軍将だから、戦場へ赴くのはいつものことだった。屋敷を留守にすることは多かったがルイーザは寂しくはなかった。軍神が宿るがごとくユーデリウスとグランズの戦勝率は言うまでもなく、生きて帰還することは目に見えていたし、また疑いもしなかった。が、今日のグランズは何かを悲しんでいた。

誰かが大切な物を失つとでも？

ルイーザの心はつぶやく。

グランズはルイーザの両手を握ったまま豪華なソファに深く座りなおすと、改めて口を開いた。「殿下が…ユーデリウス殿下がお前を召し上げたいと望んでおられる。そしてこれは拒否することができない 何故なら……」

軍神は言葉を詰まらせると、やおらルイーザの細い体をかき抱く。

「兄様」

「なぜなら……お前はそのため存在し、選ばれてしまったからだ」

嗚呼。

魂の慟哭が聴こえるかのようだった。

兄様、兄様、お許しください。

ユーデリウス邸での出来事が溢れるように思い出される。

どうぞ哀しまないください。

知っております。

わたくしは自分の運命を。宿命を。

ルイーザは自分が知っていたことを、思い出したのである。

グランスの腕の中でルイーザは顔を手で覆った。酷い孤独感に耐えられそうになかった。

永い、永い刻に至る旅が、わたくしを待つております。兄様とは道を違える旅が

全てを理解してしまった自分を虚しく思い、そしてユーデリウスの言葉の一つ一つが真実であるのを実感していた。

でも

「愛しておりました」

全てを込めて、嗚咽おえつの中から搾り出した。そしてもう一度言い直した。

「愛しております」

お兄様　いいえ、私が愛する方　。

“降りる”

「！…お待ちください。降りられるのですか？」

唐突なユーデリウスの言葉に、グランスでさえも驚いた。

“理由を言う必要はないが、わたしはこの星に降りる必要がある”

彼を見もせずにユーデリウスはその場を出ようと歩を進めたので、慌てて警備部隊を編成し船体を地上に降ろした。

「大公が立ち寄られるのはかつてない話ですね。グランス閣下」

「あの方のされる事にはついていくしかないが、我々には無謀すぎるかな……」

ようやく探し当てたのだろうか……。

グランスはルイーザと十年前に出会う前から、彼が何かを探していること、それらしい存在をユーデリウスの言動の端々から感じていた。どこの星にいるかも、どんな容貌うでうちでどんな声で話し、男なのか女なのか、人間なのかも分からなかったが、ユーデリウスがある星を攻略した際に、極めて珍しい行動をとった。

大体においてユーデリウスの戦争の仕掛け方は、本人の性格同様冷淡なもので、ある程度片がつくとさっさと部下に戦後処理を任せて次の目的地へと去る。

だから、自分が攻めた星に降り立つなど考えられないことだった。それが、周囲の反対をも押し切って、生身同然に焦土に足を降ろしたのである。其の時、グランスは彼の印象深い言葉を聴いている。

「待ちかねた。　　会わねばならん」

ほどなくしてユーデリウスは旗艦に戻り、迎え出たグランスの元に少女が投げ出されるようにつれてこられた。

「ルイーザと云うそうだ」

彼女に関しての情報を一言告げると、ユーデリウスは未成年を保護する義務を押し付けて自室に消えた。後には幼い顔に似合わない憔悴感こすいかんを載せた少女が佇んだ。

「ルイーザと言われるか」

正直、子供の扱いは不慣れではあるが、なるべくは丁寧な声音で硬直した少女の心を砕こうと、細心の注意を払う。

「……………」

か細い声で少女は答えると、涙にできないほどの苦しい悲しさを、全身から放出した。

「ルイーザ。憎い敵方ではあるが、何かの思し召しであろう…。そなたは今より私の家族となる。

良いか？」

頷くことすらできない様子に、グランスは肩ひざをついて腰を落とす。

視線を少女より低くして、彼女の小さな手を取った。

「このような形で出会ってしまったのは辛いこと。しかしこれからも、そなたや私は生きてゆかねばならない。だから私はこれ以上にそなたを悲しませることや、恐ろしいことはしないと約束する。どうか私の手を握っていただけぬか」

精一杯の優しさを示したのが功を奏して、少女はようやくグランスの瞳を見つめた。

「おじ様のうちの子になるの　？」

掠れながらも一生懸命に自我を保とうとしている健気さが、自分の居場所を確認する意思を起こした。思わず笑みがこぼれて、グランスは多少ほっとする。

「左様。ルイーザは私の娘そして妹として、ライ家の淑女として恥ずかしくない教育を施そう。

　　ようこそライ家へ。ルイーザ」

歓迎の意に、グランスが取ったルイーザの手に力がこもった。

グランスはその幼い淑女に、最大の敬意を表した。

ほぼ形骸化していた想い人よりも、過剰気味に愛情を注いだやもしれない。少女の神秘的な髪色と瞳の色のコントラストが、彼の眼を捕らえて離さなかった。半ば親であるかのように穏やかに慈しみ育てた。ユーデリウスからの預かり物であることを除けば。

しかし彼は、出逢いが宿命であることを思い知らされる……。

“喜ベグランズ。私はついに求めていたものを手に入れた”

「と、申しますと」

“私の未来はそう遠くない日に終わる。そのために私の意志を継ぐものが必要だが、そつたな……後継者ができたということであり、十年の歳月はねぎらうべきか。グランズ、黄金の瞳を私の元へ上げよ”

「時が満ちたのでございますね……」

“私とて、人の血は流れている。黄金の瞳が必要だ。許せグランズ”
果てしなく孤高の君主は、薄いグリーン色の瞳で忠実な友人を見やった。

グランズは、自分がその運命の渦中に定められていたのを改めて思う。だからこそ、
「いいえ大公。無意味な戦いであつたと、返つて思いたくはないのです。ですから彼女も理解するでしょう。……運命である」と

慣れていた屋敷の部屋と違って、倍以上は広がつたから、侍女を呼ぶにも一苦労だつた。

「今日は髪を結い上げて欲しいのよ」

「ただいま用意をさせていただきます。黄金の瞳《ヒッラ》さま」

「ええ、大公がお待ちなの。早くしてね」

衣擦れの音が暫く室内を騒がせた。

『黄金の瞳』

そう呼ばれるのにも抵抗は無くなつた。

けして好むものではないが、ユーデリウスが「ルイーザ」と口にするよりは良いのだと思おつとしていた。

「昨夜はようお休みになれたのでございますね」

ルイーザの長い髪を梳きながら、中年の召使がにこやかに言つ。

「やっと慣れてきたの。だって分かるでしょう……?」

そうでございますとも、と召使は同情的にならずいた。

宇宙に覇権をうならせるユーデリウスの居住区に、単身少女が入居したのだ。それも大公の片腕グランス將軍の元から上げられたというから、周囲はついに大公が立后するのだとか、將軍が将来自分の細君にと、育てられていた娘に横恋慕したのだとか、スキヤンダラスな噂で持ちきりだったらしい。

彼らのごく身近な人々は、俗世的な理由でルイーザが大公の傍に召抱えられたとは思っていないが。

「昨夜、わたくし観たの」

「まあ、何をでございますか」

「そうね……大公殿下にしか言えないのだけれど……」

「さようでございますでしたね……黄金の瞳様の言葉はユーデリウス様の意思でございますもの」

わが魂は汝の上に降り注ぎ、

わが言葉は汝の唇より漏れ出で、

汝の最後を駆くる時を示したり。

最後の後に鋼鎖は解かれん。

おお、

知り足るものよ、

視えたるものよ、

我は汝を斯く定めたり

(私は……共には歩まぬ者……独り待たねばならぬ身……)

ふと、風がそよぐ中ルイーザは、刻の狭間に、己が囁く言葉を聞いた。

“私を憎んで己を迷わすな。呪縛は解かれるまでついて回る。…… ルイーザ”
『はい』

“……私も人であったのだろうな”
『……！？……』

黄金の瞳はいつも

光の向こうで

私を責め立てる

ユーデリウスが、微かに光に溶け込んで、薄れていくようだった。

あの人が、そんな儂げなことを言うなんて。

己れの死期を悟った上での言葉だったか、理の深淵を知りすぎたゆえの言葉だったか、定かではない。

このところ毎日、長時間をユーデリウスの元に詰めているルイーザは、精神的な疲れを癒すべく、柔らかなデイベッドに身を任せて嘆息する。

休息の息をつく間もない。眠ってさえもユーデリウスの意思是語りかけ、絶え間なくルイーザは幻影を見続ける。もはや彼女はグランスとは違う意味で、ユーデリウスのパートナーだった。

片時も離そうとせず、彼女の時間は彼の時間であり、プライベートなどありはしない。

そしていつもの通り、ラントウール星の館にユーデリウスと対話をしながら、夜が明けてしまった光の中で、彼はふと洩らしたのだった。

危うく感情を抱きそうになって、ルイーザは沈黙する。

彼の個人的な魂の叫びは聞くにあらず。

(誰かに同情することも 悲しい運命に触れて泣くことも、憤りを突き刺すことも、愛することや恋ですら、私たちには叶わぬこと)

彼の影にもなれぬ女の存在を思い出した。

深窓に育って宇宙の広さを知らないような、たおやかな花。

熱を帯びた眼差しは、ユーデリウスのみ向けられて、絶えることが無い。

(このままで良いのです)

果実を得られぬ愛情を密かに宿しつつ、現状を受け入れているかのようだった。

(あの方は、人を愛する、お暇などございせんもの)

(誰がユーデリウス様を恐れ、憎み、忌避してもわたくしは何処までもお慕い申し上げます)
陽炎のように、ルイーザに微笑んだ。ただ彼を愛していることが、自分の存在証明であるような揺らめき。その表情を受けてルイーザは思うのだ。

彼女のような立場に育ったならば、彼を愛しただろうか。

そして、女とは斯様かまうにも自らの感情をよりどころにし、それだけを生きる糧にするのだろうか
と。

(私にはあの方しかおりません)

夢見るような口元とは裏腹に、瞳は微かな陰影とげを含んでいた。

呪縛

ユーデリウスが云った言葉が浮かぶ。

幼い頃にはユーデリウスに自由を説いて叫んだと言っのに。あれは幻だったように思えてならない。

わたくしも、魂を解放することはできないでしょう

暁の光はルイーザにも、差し込んでいたのだった。

可愛いそんな女は、

人を超えてしまった大公を取り戻そうとした。

運命への抗いを知らぬばかりに、

抗い方を取り違えて、

大公の血を流した。

それから、

初めて自分の意思で言葉を放ったのだ。

“愛しておりました”

しかし広げた翼は翼にあらず、

大公は女を受け入れなかった。

大公は自らの死を知っていた。黄金の瞳も超越した空間から観ていた。

「でもっ……」

これからの国には、いやでも彼のような巨大な存在が必要である。

ユーデリウスの言なくば開かぬ扉に、ルイーザですら足止めを食らった。「今すぐ開くのです」と危険を声高にしても兵は動かない。

忠誠を命とし、内部の裏切りを疑わない忠臣達は躊躇した。

「わたくしでも憎いと思っていたのですよ！」

このさいは私的な理由で持って一喝し、大公の部屋をこじ開けさせる。

彼女はそこで孤高の死を垣間見、長年費やしてきたあらゆる感情の一片も見当たらなかった。

私は観てしまっていたのだ。

誰も知ることのない、彼にしかない哀しみを……。

それが人の理であることを。

あの瞬間、私の彼に対する理由が、敗れたことも理解したのだ。

（観たくはなかった）

たゆとうように穏やかな暁の中で、彼が言わんとしていたのは、干渉なき自由を己こそが得たのだと、願ってやまないことである。

「望むれど自ら定むは難し

”

宇宙が未だ必要とすべき大公が、一人の哀れな娘に命を奪われての後も、黄金の瞳のルイーザの日常は変わりなかった。ただ、冷気を漂わすような存在ではなく、温かな人の言葉も交わせる

男が傍らにいます。

彼と残り託された礎を築くために、眠る暇をも惜しんだ。

グランズとは心無いながらも会つには難しい立場にあり、いつしか彼は黄金の瞳の中で想い出となった。

自分は、自分が心血を注いだ新つ国を見る事はできない。

「今宵の会議は、いよいよ帝政発足の決めですな」

「黄金の瞳様より内々の触れが」

目立たぬように、様々な年齢の男女が幾日も幾日も一つの部屋の中へ滑り込み、何かを書きとめ、議論し、ルイーザの言葉に耳を傾ける。

「ギャラクシアン達よ、これはわたくし亡き後の遺言としてお聞きなさい

。 。
ユーデリウスは鍵門を開きました。彼らはその存在も知らずに生を終えることでしょう。

帝政共同体は半ばユーデリウスのため、半ば人類全体のためにあるもの。これから続く長い歴史の中で選ばれ、人々の頂点に立ち導く皇帝には、ユーデリウスの意を継ぐ者の名を与えなさい。それこそが皇帝の称号となりレガリアとなるのです。

ギャラクシアン・グループは皇帝の諮問機関となり、時に皇帝をも超え運命に追従を強制するものたち……………。

やがて大いなるものの片鱗が、銀翼を宇宙に翻して、運命められた刻印を成す者が立つでしょう。それは、王冠を抱いて……………！
そこにいた者たちは、ルイーザと同じビジョンを観たようだった。

感動に揺るがされた彼らの静かな波が、やがて拍手を持って受け入れられ、成立したことを告げる。

「ルイーザを称えよ！帝政共同体に栄光を！」

「ルイーザ万歳……………！」

「レヴィンス殿下、ユーデリウス二世万歳！」

「皇帝陛下！」

「黄金の瞳・ルイザー！」

歓呼の声にもしかし、ルイザーは沈黙したままであった。

されどいづれも

“其の”ために在りありて

やがて流星は彼方を目指す

ラスタミニアム
L・M・歴〇〇〇一年（元年）

帝政共同体初代皇帝ユーデリウス二世即位

【外伝〓空白の言葉 完】